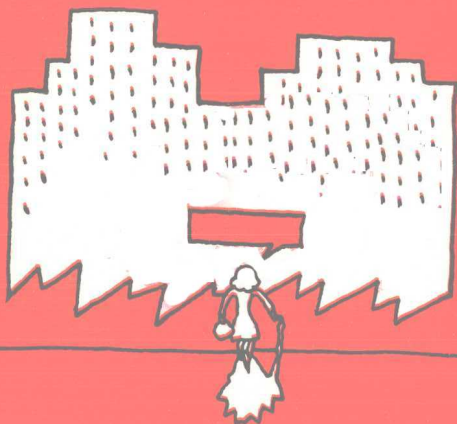


何とかしなくちや

上坂冬子

しなくちゃ

上土原冬子



講談社版

著者紹介

昭和5年生れ。愛知県豊田東高校卒。トヨタ自動車
人事課勤務を経て、主として働く女性を対象にして
評論活動をつづける。

日本労働協会教育諮問委員。

1963年西ドイツ政府、64年米國務省、68年ソ連文化
省招待により働く女性を視察。他に中国、韓国、東
欧などを視察。



何とかしなくちゃ

昭和四四年九月二〇日 第一刷発行

昭和四五年一月二八日 第三刷発行

著者 上坂冬子

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二

郵便番号 一一二

電話 東京(942)一一一一(大代表)

振替 東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社若林製本所

定価 三八〇円

◎ 著丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
上坂冬子 昭和四四年

Printed in Japan

(分) 5-0-95 (製) 123347 (出) 2253 (0)

目次

風呂敷包みひとつで東京へ	九
結婚式直前に婚約を解消	一〇
三等車のシートのかたすみに	一四
これだけ男性がいるのだから	一六
上京したとたんに原稿の注文が	一九
いじわるBGの隣の席に……	二三
二年かよえば幼稚園の先生に	二三
書きためた原稿をもって	三三
何とか下宿を探さなくちゃ	三三
またたく間に〃上坂冬子〃が誕生	三三
権利金敷金なし四畳半五千五百円	四〇
寒い名前の異色女流新人	四四
高卒二十八歳まで知性ある人求む	四四
私なんかまだ気楽な身分	四四
これが知性ある女性の仕事？	五〇

高卒の学歴がうらめしい……

一流の出版社から取材の依頼が

自殺した被爆少女の取材の依頼が

しまった！ カメラを忘れた！

とりつくしまもないお父さん

ツイていたはじめての取材

一流婦人雜誌から連載ルポの依頼

後ればせながら充実した青春が

ひたすら貯金した原稿料

忘れられない魚菜先生のことば

思わず口走った退社の意志

単調だが安全なサラリーガール生活

どうしよう、ペンがうごかない！

行きづまったらガス栓をひねろう

独身編集者に呼び出されて

私の就職のためにその人は強引に

もしかしたらこの人は私に……

五二 五五 五七 六〇 六三 六六 六九 七二 七三 七六 七九 八一 八三 八六 八八 九一 九四

「一身上の都合により退職……」
結婚に縁のない自分がうらめしく
今さら物ほしそうに男性は追わない
証券会社支店長との縁談が……
株の取引ではあるまいし
ろくでもない男ばかりが――
勤続十二年退職金七万四百円
年はゴマかし家賃は値切って
まさかこの奥さん三角関係――
一人でチリ鍋を食べる佗びしさ
デパートの婦人部から講演の依頼
ガス・水道完備マネジャーつき
月刊誌の連載も出版の依頼も……
一日五十枚――よしっ、やるぞ……
ホテルの部屋へ食糧を持ち込んで
昼なお暗き部屋にとじこもって
何かやらずにはいられないB G

コキ使えるのはやっぱり男性

三百枚の原稿は紙くずに――？

B G 生活は軍艦にのった水兵

ああ、何と長い一分間だったか

「お給料の希望があったらどうぞ」

「あなたの学歴で二万八千円――」

秋山ちえ子さんから突然電話が……

モリモリ食べる人こそ理想の男性

やっと目の目を見た三百枚の原稿

費用・通訳つきのアメリカ招待旅行

せっぱつまれば当ってください

関西弁ペラペラのライシャワーさん

両親の見送りはことわって……

眠っている間にアメリカ到着

「ハイ・ミスにはなりたくないわ」

婦人記者の変貌にびっくり

日本料理店にいた日本女性

一人アメリカで自活する苦しみ	一五
サンフランシスコの夜景を眺めて	一七
はるばると原稿の依頼が	一八
ジョンソン候補の熱い大きな手	一九
コンパクトをおみやげに……	二六
チケットの換金を忘れた！	二七
お湯につかってパインをがぶり	二八
部屋のスミに男物の着物が……	二九
帰国がそんなにおめでたい？	三〇
二カ月ぶりのBG生活……	三二
ピアノを買って「乙女の祈り」を	三三
女一人で生きるなら家ぐらい	三六
まっ赤なレースのワンピースで	三七
よし、土地を買い家を建てよう	三八
原稿料の貯金が百三十万円に	三九
もしかしたらこの人は私を……	四〇
ふと気がつけばもう三十二歳	四一

父を病氣にして講演旅行に

三九

たずねて来たハイ・ミスと……

三三

初恋の人の夢を見たその夜

三六

山奥の学校の先生的雰囲気

三八

結婚は望まないが一生離れたくない

四〇

生活に困ったら二階を貸せば

四二

不動産屋さんの盲点について

四四

一度の見合いでホレこんだ家

四六

雨の夜中に無気味な電話が

四八

勤め先は囑託にしてみらう

五〇

全財産の宝石箱もからっぽにされ

五二

その夜はまんじりともせず

五四

生まれてはじめてのまじめさが

五六

ころんでもただでは起きるな

五八

深夜、机の前でニコリ笑って

六〇

装　　幀　湯村　輝彦

まんが　馬場　のぼる

何とかしなくちや

風呂敷包みひとつで東京へ

こうもり傘と風呂敷包みといえは昔から家出娘のスタイルときまっている。

今から十年前、昭和三十三年の春に、私はそのこうもり傘と風呂敷包み一個を下げてたった一人で名古屋から東京へやってきた。二十六歳。青春の日はそろそろかげりはじめていた。

そのころはまだ折りたたみ式の傘などホンの一部の新しがり屋がもっている位で、一般には普及しておらず、私はマッ赤なナイロンの生地を張った、黒い柄の傘をステッキのように使っていた。出発の前日に、近くの洋品店の特売デーで八百五十円で買ったものである。

東京へいったら派手にしなくちゃ、田舎者は馬鹿にされる。——そんな不安から思いきってマッ赤をえらんだ事もいまだにはつきり覚えている。

風呂敷包みの中には当座の着替えと名古屋駅を発つときに買ったアンパンとキャラメル、それに貯金通帳が一冊入っていた。「従業員預金通帳」とかいたブルーの表紙の中にこれまた忘れもしない残高が十八万三千四百四十円とかき入れられてあった。勤続九年目の春までにため

た預金総額である。

時は春。日は三月十五日であった。それまで、私は名古屋から小一時間ばかり入ったT市の自動車会社に勤めていたのを、念願かなって憧れの東京支社に転勤させてもらえたのだ。

東京！ 東京——。東京？

ああ、しかしあんなに憧れていた東京へ行けるなんて夢のような幸運というべきなのに、いざ転勤と決まると、私は急に不安と、気おくれと、うしろめたさと、その他もろもろのまぜ合わさったような思いで内心ふるえはじめたのである。この先どんな運命が私を待っているのだろうか？

十年もたった今、三月十五日というあの出発の日付をはっきりと思い出せるのもわけがある。私はそのとき、生まれてはじめて易者の言葉にしたがったのだ。

東京支社には三月十六日から出勤するという辞令を受けていた。少なくとも一週間前には行って東京というところに体をならしておきたいからと、最初私は、三月十日を上京の日ときめたのである。が、三月十日と心ぎめしてから私はアッと思った。

十日は止めとこう、十日は絶対にいけない。何が何でも三月十日はよそう——。

結婚式直前に婚約を解消

その三年前、つまり二十三歳の年の三月に、私は五年間にわたる許婚者と、婚約を解消して

しまったのであった。

実は私には高校を卒業すると同時に許婚者が決まっていた。相手は大学教授の卵で、北海道大学の研究室で助手をしているという、色の白い、顔の丸いおとなしい人であった。彼の実家が私の家の近くにあつて、家同士で話が決まり、私が二十三歳になったら式を挙げさせると、いつのまにか決まっていたのである。

何しろ北海道と名古屋とは、ろくに会うことも出来ない。しかも相手は、うるう年に一べん位しか笑わない謹厳実直な人である。年に一度、夏休みだけかえってくるその人と、私は海岸べりを一言も交さずにデイトしながら、心の奥では毎年「いやだ、死んでもこんな人の所へおヨメにいくのはいやだ」と思っていた。

が、——かといってこの話をこわってしまったらこの先どうなるのだろう。来年も、さ来年もえんえんとハンコで押したような単調なサラリーガール生活がつづくばかり。

ああいやだ、いやだと思ひながらも、だからといって万一オールドミスにでもなったら大変だという不安から、結局私は、なりゆきに身を任せ、不機嫌な顔でジロリと彼氏の顔を見つめつつ、ヘンなデイトをくり返していたのである。

やがてその二十三歳が近づき、結婚の日どりが決まった。写真屋の手配も済んだという。

その時。ある夜、私は一旦床に入ったのをムクツと起き上がり、そしてまるで夢遊病者のように家をぬけ出して、たまたま春休みで帰っていた彼を、夜の十時に一人で訪ねたのである。

「まあ、こんなに遅くに何事ですか」

といぶかし気に迎えてくれる彼のお母さんをシリ目に、私は敢然として彼を戸外に呼び出し、一思いに言い放ったのであった。

「私、あなたと結婚するのがいやなんです。どうしても！ だから婚約を解消して下さい。日取りが決まったらもう嫌で、嫌でどうしようもなくなったの」

あとは何を言ったかおぼえていない。一体何故？ とおどろく彼にむかつて、何故か分らないけれど、あなたのその白くてまん丸い女みたいな手を見ていると、吐き気がしてくるんです、おねがいだから誰か別の人を探して下さい、とヒステリックに叫んだことだけ、かすかに覚えていて。

大人しい人だった。厚ぼったいくちびるをちょっとゆがめて、

「そうですか、あなたの考えがそう決まった以上、解消する以外にありません」

というのと、腕を組んだままひっそりと家にもどっていった。

ところが、である。それから約一カ月たった三月十日、つまり本来ならば私と彼とが結婚式をあげるはずになっていたその日に、何と、彼は予定通り式をあげたではないか。

もちろん見合いで、相手の女性は近くの小学校の先生だとか。彼女は一目で彼に好意を抱き、即座に辞表を出して、見合いから挙式まですべて一カ月で事をはこんだ上、そそくさと彼について北海道に渡っていったという。

人づてにその話を聞いた私はポカンと口をあけ、しばらく宙を見つめた。三月十日の式場で、私の立つべき位置に、私の代わりに見も知らない人がハマリ込んだのである。しかもアッ

という間に——。胸の奥にドカンと穴があいたような思いであった。

私が願ひ出て、私の言い出した通りに事がはこんだのだから何一つ文句のつけようはなかったけれど、余りの見事さに私はガク然とし、不意にアッパーカットを一バツくらったような思いで、へたへたとその場にすわり込んでしまったのである。

彼には未練はないけれど、余りといえは余りの事実、人と人のむすびつきって一体何なのか——。

さて、話を元に戻して、私はその思い出深い三月十日という日がらを忌みきらった。もしあのインネンの悪い三月十日に上京したとしたら、何となく東京についた途端に、不意をうたれて又クラクラとへたばらなきやならないような事件が私をまっけているんじゃないか——。

ここまで考えて、私は生まれて初めて「易」と看板を立てたじいさんの前に立ったのである。私の家の近くの町角で、いつも夕方になるとうすあかりをともしじいさんがいた。

「ホホウ。縁談だね。ウン、東の方か。こりゃいい。何？ あんた二十六歳。ウン今度はきつときまるよ。出発は十五日にしなさい。十五日に発てば先はひらけると出とる。東京の人は待つとるぞオ」

縁談どころじゃないのよ、じいさん。縁談解消で、一人淋しく上京するのよ……とノドまで出かかったのを噛み殺しながら、私はじいさんに二百円渡した。見料は百円だったけれどチップをはずんだのである。

神様、どうぞいいさんのいう通り、東京へ行って先がひらけますように――。

つね日頃、百円のお金もムダには使わぬ主義の私は、一金百円也のチップの中に、祈るような思いをこめた。

三等車のシートのかたすみに

新幹線はまだできていなかった。名古屋から東京まで、たしか六時間ばかりかかったと思う。私は三等車（そのころは一番安い料金の列車をこう呼んだ）のみどり色のシートのすみにチンマリと腰をかけた。こうもり傘を横におき、風呂敷包みをヒザにのせ、暮れのポータスで新調したモヘアのグレイのオーバーだけが、いかにもはれがましかったが、おそらくそのオーバーとは対照的に、私はうつろな顔つきだったと思う。

四人掛けの向う側には、そう新婚一年目だろうか、品のよい夫婦が生まれたばかりの赤ん坊を抱いてすわっていた。私の隣にるのは多分そのお姑さんしゅうとだろう。

三人は、時々どき込むように赤ん坊の顔をながめ、無言のうちにコックリと目で笑っている。ぐっすりとねた赤ん坊は、奥さんからご主人へ、ご主人からお姑さんへと、時々廻し抱きされていた。

「マア、きれい、ホラあなた富士山よ」

ついつられて窓の外を見ると静岡である。